

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	高畑 芳美
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 名須川 知子 副主査：（岡山大学教授） 高橋 敏之 委員：（鳴門教育大学教授） 浜崎 隆司 委員：（岡山大学教授） 西山 修 委員：（兵庫教育大学教授） 井澤 信三
3. 論文題目	主体的な子育て・親育ちのための子育て支援に関する研究 －0, 1, 2 歳児の親子の遊びを中心に－
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 高畑芳美 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成30年7月14日（土）16時10分～17時          場所：兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 演習室4</p> <p><b>1. 学位論文の構成と概要</b></p> <p>第1章 研究の背景と目的          第1節 0, 1, 2 歳児と母親を取り巻く現状と課題          第2節 0, 1, 2 歳児の母親が抱える不安の実態調査          第3節 研究の方法と内容構成</p> <p>第2章 主体的な親子の遊びを読み取るためのエピソード記録          第1節 子育て支援の場における0, 1, 2 歳児の主体的な親子の遊び          第2節 主体的な親子の遊びを読み取るためのエピソード記録の作成          第3節 エピソード記録を用いた0 歳児の親子の遊びの事例研究</p> <p>第3章 0, 1, 2 歳児の主体的な親子の遊びと母親の関わりの様相          第1節 子育て支援者による親子の遊びのエピソード記録          第2節 エピソード記録に見られる0, 1, 2 歳児の主体的な親子の遊びの様相          第3節 エピソード記録に見られる母親の関わりの様相</p> <p>第4章 主体的な子育て・親育ちへの支援と今後の課題          第1節 0, 1, 2 歳児の親子の遊びを通じた主体的な子育てへの支援          第2節 0, 1, 2 歳児の親子の遊びを通じた主体的な母親の育ちへの支援          第3節 0, 1, 2 歳児と母親の育ちがつながる支援          第4節 今後の課題</p> <p>引用文献</p>

第1章：現代社会では、自然に地域の中で親子が交流し、子育てを支え合うことが困難であり、育児不安や孤立した子育てが問題となっている。そこで、親子を支える仕組みを意図的につくり、様々な地域での子育て支援が展開されている。しかしながら、実際に子育て支援の場を利用する親子の遊びの内容のあり方や適切な支援方法についての研究はほとんど見当たらない。そこで、子育て支援の場における0, 1, 2歳児の主体的な遊びの実態と子どもに関わる母親の行動について明らかにし、適切な子育て支援のあり方を提示することが本研究の目的である。まず、子育て支援に関する先行研究や日本の施策の動向を整理した上で本研究の位置づけと課題を明示した。すなわち、現行の子ども・子育て支援制度では「保育の必要性がない」認定外の0, 1, 2歳児親子に子育て支援事業が用意されているが、0, 1, 2歳児の母親のインタビュー調査からは、保育参加型のプログラムやイベント中心の子育て支援は、受け身的で所属意識が持ちにくく、主体性が維持しにくいという問題が明らかとなっている。また、子育て支援ルームにおける支援者の役割は、直接子どもを保育する保育者や、利用者に支援サービスを提供するケアマネジャーと異なる役割が求められることが先行研究から明らかとなった。

第2章：主体的な親子の遊びの実態を明らかにするために、0, 1, 2歳児の子育て支援ルームでの遊びの内容についてエピソード記録を用いることとした。そこで、親子の遊びを読み取り評価する方法を検討した結果、ニュージーランドのラーニング・ストーリーを援用し、本研究独自の親子の遊びのエピソード記録方法を開発した。まず、0歳児親子2組を対象にしたエピソード記録から母親が我が子の視点に立った遊びの見方が出来るようになる過程を明らかにし、本研究におけるエピソード記録を対象とする有用性が確認できたが、母親が記録者であるという課題も指摘できた。

第3章：そこで、子育て支援者によるエピソード記録を対象として、0, 1, 2歳児の主体的な親子の遊びと母親の関わりの様相に関して分析した。すなわち、1年半の間に収集した親子の遊びのエピソード記録155事例をKH Coderを活用した量的分析と、各年齢に特徴的な動きに着目した質的分析から、0, 1, 2歳児の遊びの様相を明らかにした。同様に、子どもの遊びに関わる母親の行動について、各年齢と愛着的関わりや受容的関わり等8つのコードとの関連を検討した。その結果、以下の4点を新たな知見として見出した。1点目は、0, 1, 2歳児の主体的な遊びには年齢に特徴的な「動き」が見られた。同時に、0歳児は関わる人を意識し、相互作用により遊びが持続する「他者を意識した動き」が出現し、改めて遊びに母親が関わる重要性が示された。2点目として、0, 1, 2歳児は、自分が獲得した段階の動きより高度な段階の遊びに挑戦していくことである。このことから、安全面を重視する子育て支援の場の環境構成を見直す知見が得られた。3点目に、1, 2歳児は、共に生活する母親の真似を遊びとして取り入れていた。このことから、母親は、日常的生活の中に子どもの遊びの原型が存在し、日常的生活が子どもにとって貴重な遊びのための学習となっていることを再確認できた。4点目として、支援者が記録した親子の遊びを母親が「読む」効果があげられる。母親は、我が子の遊びの記録を読むことで、子どもの見方や関わり方、遊びの意義や自身の存在意義を客観的に捉え直すことができた。

第4章：主体的に育つ子育て・親育ちへの適切な支援として、子育て支援の場において、0, 1, 2歳児が年齢的な動きの違いに応じた遊びを展開出来ることを予測した物的・人的な環境の設定が必要であること、そして母親には、エピソード記録を通した子どもの主体的な遊びの意味への気付きを促すこと、さらに発達に応じた関わりを意識するための具体的なモデルとして、他の親子への関わりに注意が向くような支援が必要であることがわかった。今後、エピソード記録の収集と検証を積み重ね、主体的に育つ親子の遊びを保障しできる子育て支援者の質の向上、母親自身の主体性を活かした母親による記録の方法やさらに、親子が地域の中心となって周囲に広くつながるための支援のあり方についての今後の課題が明らかとなった。

## 2. 審査経過

### 論文の独創性

本論文については、これまで研究が稀少である子育て支援ルームでの親子の遊びの実態の分

析から、子育て支援ルームでの支援方法のあり方を探求しようとする意欲的な内容であることが評価された。すなわち、子育て支援ルームの年齢による身体の動きの相違や、子どもをめぐる母親の位置が明確になり、子育て支援ルームでの支援者として、遊びを通した学びを促す環境や支援のあり方の示唆を得るものとしても高く評価された。これまで、子育て支援ルームでの実際の親子の様子分析から遊びにおける身体の動きや関わり等についての研究は稀少であり、その中での年齢別の特性がみられたことから、結果の独創性がみられると考える。

#### 論文の発展性・実践への貢献

本論文の結果から、子育て支援ルームにおける親子の適切な環境のあり方及び母親との遊びへの支援が明確になった。さらに、エピソード記録の方法についても、母親自身が記録する方法を開発出来た。このことは、今後、子育て支援ルームにおける母親としての、育児の喜びや成長への一つの方法と実践にも大いに活用されていく可能性が高いことがわかった。この方法はわが国でも唯一のものであり、汎用性があるものとして、本論文をベースとして実践の場でも今後の発展に期待が出来る。

### 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、高畑芳美の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。